



光の街

i do

－ひかりのまち－

『光の街』に住む人々にとって災難はつきものであり、彼らはそのたびに「たいしたことじゃない」と自分に言い聞かせる。事実、時間が経てば、それは「たいしたことじゃない」ように思えてくるのである。

ある寒い冬に、高層ビルから飛び降りた男がいた。人々は誰もそれを気にすることなく通り過ぎた。彼がまだ二十歳で、遠い田舎から出て来たことも、慎ましくも、その愚かな夢を、その何もかもを知ることなく、人々は通り過ぎていった。でも、一人だけ、彼女は静かにその死体の傍に佇んでいた。そして、死体のやたら綺麗なその顔をじっと見つめていた。

－女－

彼女の携帯は鳴り続けた。彼女自身が、それを望んでいたからだ。彼女は電話に出ることもあったし、出ないこともあった。電話の相手と寝ることもあったし、寝ないこともあった。声音で彼女は想像し、その相手が自分に何をもちたかを考えた。でも、結局会って、セックスが終われば同じだ。彼女はいつも自分がからっぽになったような気がした。

電話がかかってきた。

「もしもし？」

「...あの...」

「なあに？」

「僕は...」

「ねえ、わかってるのよ。あたし、全部。いいわ。どこですか？」

古びたラブホテルで、彼女はその男に会った。男はまだ幼く、どこか中性的な雰囲気があった。男の瞳に彼女は少し動揺する。そして躊躇した。男が本当に求めているものと、今から行おうとしていることとが乖離しているのではないかと思ったからだ。でも、結局、彼女は男を誘った。そして、男はそれに応えた。

「すみません」

全てが終わると彼は恥ずかしそうに言った。

「久しぶりだったから」

「前はいつ？」

「二年前」

「そう」

と彼女は言った。彼の不器用さは彼女に昔のことを思い出させた。そして悲しさとともに切なさを感じた。

その夜、彼女は饒舌だった。昔話をした。いくつかの嘘はあったが、彼女にはもうつかないかなければならない嘘がたくさんあった。その中で彼女は正直なつもりだったし、少なくとも真摯だった。

「この街には慣れた？」と彼女は聞いた。

彼は微笑んだ。

「なんだか嫌な事ばかりで」

「でも綺麗な街でしょ。光があらゆる場所を包んでる」

「綺麗ですね」と彼は答えた。「...でもなんだか」

「何？」

「全部偽物みたいな気がする」

「どうして？」

「本当の光は人の心の中にあるから」

彼女はその言葉に啞然として、それから思わず笑ってしまった。彼はまた恥ずかしそうに俯いた。

「おかしいですか？」

ううんと彼女は首を振った。

「ねえ...それってあたしの中にもあるのかしら？」と彼女は笑ったまま言った。

「誰の心にも。あなたの心にも光は宿ってる」

彼女はそこで笑うのをやめる。そして冷徹な瞳で男を見据えた。

「あたしにはないわよ」

—スティンクー

純粹なる悪というものがあるとしたらそれはスティンクの事だ。彼はただ自分の本能のままに行動し、徹底的に人を痛めつけた。そして彼は死ぬことがない。いつまでも生き続け、誰かを傷つける。

男は、ビルの屋上で煙草を吸っていた。長く続く雨で、夜空は霧に覆われていた。『光の街』にはどこか物憂さや気怠さが漂っているように見えた。あの女の事をふと思い出した。ただ一夜を共にした女。この街に何かを吸いこまれてしまった女。彼女を抱いている時に彼はなぜか初めて付き合った恋人の事を思い出した。なぜだかよくわからない。ただ、そのせいで女の事がとても愛おしい存在みたいに思えた。

自分勝手と知りながら、昔の恋人の事が懐かしくなった。優しいことだけが取り柄の女。彼女は

今どうしているんだろう。その優しさと引き換えに何を失ってしまったんだろう。彼にはもうわからない。

スティンクは彼の後ろ姿をずっと眺めていた。そして、本能のままに行動しただけだ。

—ひかりのまち—

彼女は仕事帰りだった。彼女は小学校の教師だったのだ。流されるように彼女は教師になった。そして同じような理由で娼婦になった。

はじめ、彼女の瞳には、それは大きな操り人形みたいに見えた。酷使され、壊れて打ち捨てられた操り人形。彼女はゆっくりとそれに近づいていく。そして、それがあの男だと気付いた。彼女はそっと腰を下ろす。ぐにゃぐにゃと折れ曲がり、原型すら留めていないその肉体で、彼の顔だけは驚くくらい綺麗だった。目をつむり、永遠の無表情をたたえている。彼女はそっとその頬を撫でた。その肌は硬く冷たかった。

—あたしの中の光ってなんなの？

彼女はそう聞いてみる。でも答えはもうない。

闇夜が訪れても、光はいまだこの街を包んでいる。なぜなら、ここは『ひかりのまち』だから。彼女と男はじっとそこにいる。そのうち、光は彼らを包んで、溶かすように彼女たちの姿を消していった。

光の街

<http://p.booklog.jp/book/65151>

著者 : ido

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/bowrayido/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/65151>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/65151>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ